

- II-5 視線検出装置 (Gazefinder) を用いた ASD 早期診断の有用性の検討
 ○齊藤まなぶ¹⁾ 坂本由唯²⁾ 吉田和貴²⁾ 柞木田なつみ²⁾
 松原侑里²⁾ 吉田恵心³⁾ 足立匡基³⁾ 高橋芳雄³⁾ 安田小響³⁾
 栗林理人³⁾ 中村和彦²⁾³⁾
 (弘前大学医学部附属病院神経科精神科¹⁾
 弘前大学大学院医学研究科神経精神医学講座²⁾
 弘前大学医学部附属子どものこころの発達研究センター³⁾)

【背景・目的】自閉症スペクトラム障害 (ASD) は対人交流などの社会性の障害を有することが特徴であり、近年、視覚情報処理能力を反映する注視点の測定が社会性障害の指標として注目されている。ASD は若年であればあるほど診断は難しく、早期診断を可能にするバイオマーカーの発見が求められている。本研究は弘前市 5 歳児発達健診において、盲検下で Gazefinder による注視点測定を行い、ASD 診断に有用な指標を発見し、測定結果を他の尺度とともに統計学的に解析し、ASD 診断補助装置としての有用性を検討することを目的とした。

【方法】2013～2015 年度までの 3 年間で 438 名に注視点測定を施行した。最終的にスクリーニングおよび発達健診で異常のない児を健常児 (68 名)、DSM-5 の診断基準を満たした児を ASD 児 (64 名) とした。二群において各画像の注視率を比較し、社会性指標との相関を確認した。また出てきた指標に対し ROS 分析を行い、カットオフ値を定めた。さらにロジスティック回帰分析を用いて、既存のスクリーニング検査と注視率測定を行った場合の ASD 診断の Odds Ratio を比較した。

【結果】二群において人と幾何学模様の映像に有意差があり、特に同じサイズでの人のエリアへの注視率は健常児に比べて ASD 児では有意に低下した ($p<0.01$)。それぞれの映像において社会性指標と相関があった。男女別比較では、女兒においてのみ ASD 児と健常児に有意差があった ($p<0.05$)。女兒の ROC 分析では、AUC: 0.762、 $p<0.001$ であり、中等度の予測能・診断能が得られた。カットオフ値を注視率 50% に設定し、2016 年度参加者も含めた 466 名で解析しなおしたところ、やはり女兒において有効な診断予測が可能である結果を得た。

【考察】5 歳の ASD 児は興味のある映像への注視は長く、興味のない映像への注視は短いことが確認された。「人」への注視は女兒 ASD において、健常児との差が顕著であったことから、社会性の発達に男女差がある可能性が示唆される。女兒の「人」へ注視率を測定することで ASD の早期発見に貢献できる可能性が高い。ASD 児は 5 歳ですでに人への関心が薄いため、より早期に介入が必要である。

- III-7 ウイルス感染と胆道閉鎖症—CCL5 の意義—
 ○島田 拓^{1,2)}、木村 俊郎²⁾、早狩 亮¹⁾、松宮 朋穂¹⁾、
 吉田 秀見¹⁾、今泉 忠淳¹⁾、袴田 健一²⁾
 (弘前大学大学院医学研究科 脳血管病態学講座¹⁾、
 同 消化器外科学講座²⁾)

- II-6 当科における甲状腺乳頭癌治療の現状と課題
 ○西 隆、井川明子、西村顕正、袴田健一
 (弘前大学医学部附属病院 消化器・乳腺・甲状腺外科)

- III-8 バレーボールによる膝前十字靭帯損傷の受傷状況調査
 ○菊田祐希子¹⁾ 木村由佳¹⁾ 佐々木静¹⁾ 奈良岡琢哉¹⁾
 山本祐司¹⁾ 津田英一²⁾ 石橋恭之¹⁾
 (弘前大学大学院医学研究科 整形外科学講座¹⁾
 弘前大学大学院医学研究科 リハビリテーション医学講座²⁾)